

重度・重複障害児の指導に関わる教職員の意識調査

山根 康代

畿央大学教育学部現代教育学科（〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2）

Attitude survey of the teacher about the instruction for the children with profound and multiple disabilities

Yasuyo YAMANE

Department of Education, Faculty of Education, Kio University

(4-2-2 Umami-naka, Koryo-cho, Kitakatsuragi-gun, Nara 635-0832, Japan)

要約 本研究では、肢体不自由特別支援学校で教育に携わっている教職員に重度・重複障害児の指導に関する取組やその課題についてアンケート調査を実施して、重度・重複障害児に対する学校教育における教育活動の課題について考察した。その結果、重度・重複障害児において、卒業までにつけたい力として、コミュニケーション力が挙げられた。また、重度・重複障害児を教育する際には、身体に関する配慮（健康管理等）の重要性が示唆された。今後、ますます重度・重複障害児教育の専門性の維持・向上・継承が求められる中、学校教育において、重度・重複障害児の身体に関する療育的な実践に加えて、コミュニケーション活動の充実などの教育実践の在り方を更に検討していく必要があると思われる。

Keywords：重度・重複障害児、教育活動、意識調査、コミュニケーション力、専門性

I はじめに

近年、特別支援教育を受けている子どもたちの障害の重度・重複化及び多様化が進んでおり、特別支援学校の多くに「重複障害学級」が設置され、令和4年度で小中学部では、31.7%、高等部では、17.6%の重複障害児が在籍している。特に肢体不自由特別支援学校では、85.5%の重複障害児が在籍している。また、令和4年度に特別支援学校において医療的ケアを受けている幼児児童生徒は8,361人、幼稚園、小中学校及び高等学校においては2,130人に及んでおり、特に通常学校において増加の一途をたどっている（文部科学省, 2023）。筆者は、重度・重複障害児の教育的支援について検討することは喫緊の課題であると考え、これまでの研究において、重症心身障害児（超重症児も含む）及び重度・重複障害児（以後重度・重複障害児とする）の教育的支援の方法等について述べてきた（山根, 2021；山根, 2022；山根, 2023）。

医療技術の進歩により重度・重複障害児が地域や家庭で生活できるようになり、多くの人と関わりながら生活をしている。WHOQOL（1998）では、Quality of Lifeを『個人が生活する文化や価値観のなかで、目標や期待、基準または関心に関連した自分自身の人生

の状況に対する認識』と定義している。そして、QOLの6つの構成領域（身体的、心理的、自立のレベル、社会関係、生活環境、精神性・宗教・信念）の中の「自立のレベル」領域では「コミュニケーション能力」また、「社会関係」領域においては「人間関係」が示されている。これらのことから、重度・重複障害児が自ら自分の感情や意思を少しでも他者に伝えることができるようになれば、重度・重複障害児のQOLは高まり、社会参加の第一歩となるであろうと考えられる。つまり、重度・重複障害児がQOLを高め、より効果的な社会参加を行うためには他者とのコミュニケーションをどのように取っていくのかが重要な課題の1つである。重度・重複障害児のコミュニケーション力を高めるような関わりや教育的な支援を実践しながら、個々の教育的ニーズに応じた学びを学校教育では提供する必要があると筆者は考えている。

文部科学省は『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適化学びと、協働的な学びの実現～（答申）』（2021）の中で、目指す教職員の姿を「教師が技術の発達や新たなニーズなど学校教育を取り巻く環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて探究心を持ちつつ自律的かつ継続的に新しい知識・技能を学び続け、子供

一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている。その際、子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている。」と記されている。そして、教職員に求められる資質能力として、「使命感や責任感、教育的愛情、教科や教職に関する専門的知識、実践的指導力、総合的人間力、コミュニケーション能力、ファシリテーション能力など」が挙げられている。また、「Society5.0に向けた人材育成～ 社会が変わる、学びが変わる ～」(2019)、Society3.0 (工業社会)、Society4.0 (情報社会)、Society5.0 (超スマート社会) という社会の変化と対応させて、学校ver.1.0 (「勉強」の時代)、学校ver.2.0 (「学習」の時代)、学校ver.3.0 (「学び」の時代) という学校像の発展も示されている。さらに、「協働的な学び」と「個別最適な学び」が謳われ、個人の特性や発達段階に応じた支援や学びを提供することが課せられている。そして、教職員には子どもたちの学びや活動の伴走者の役割が求められている。また、芝山 (2010) は学校教育や教師に求められる社会的要求が加算的に増加している現状を踏まえて、「教師の職務や専門性の根拠を、当事者である教師自身が見失いかねない事態が考えられる」と指摘している。以上のように教職員に求められる資質及び能力は時代ともに変化し、また、多くのことを期待される現状に至っている。船橋 (2016) は、「ここからさらに、通常の学校で特別支援教育に携わる教員や特別支援学校の教員を想定すると、教師の専門性をめぐっては間口は広く、奥行きが果てしない課題となるように思われる」と述べ、その様子を図式化して表している。障害のある子ども達への教育においては、障害に関する知識や特性に応じた指導法などが求められ、専門性に基づく教育支援が実践されている。そして、特別支援学校に在籍する児童生徒の障害は重度・重複化、多様化しており、教職員に求められる専門的な知識や実践力及び指導力は多岐にわたっている。特に肢体不自由特別支援学校においては他の障害種に比べ、先にも述べたように重複障害学級の在籍率が高いこと、さらには、医療的ケアを必要とする子どもたちがより多く在籍していることなどから、さらに高い専門性が要求されている。一方で、専門性を伴う実践力や指導力はその教職員の実験の経験を通して育まれるものであることを考えるとたとえ同一校であってもそれぞれの教職員の考える専門性や教育に対する考え方や思いは様々で、幅広いものになっているのではないかと考えられる。しかし、現在、特別支援学校の教職員の意識調査については、知的障害教育や聴覚障害教育などではなされているが、肢体不自由教育についての意識調査はキャリア教育 (越智ら, 2018) など特定

の教育方法等に関する内容の調査研究はあるもののあまり研究されていないのが現状である。さらに、重度・重複障害児の教育における教職員の意識調査については、武蔵 (2021) の教員の医療的ケアの実施に関する意識や重複障害児への教育に関わることへの意識調査はあるものの、教育実践にまで言及した研究はなされていない。しかし、超重症児に言及した指導に関しては、野崎 (2015) が、「特別支援学校における超重症児への指導とその成果に関する教師の意識調査」の結果を①担任教師は評価を客観性のあるものにしなければならないと感じている一方、記録方法について困難や限界を感じていることがうかがわれた、②脳機能障害の程度が重いほど、子どもの変容に関する評価は肯定的になりづらく、より適切なかかわり方の発見に至りにくい一方、教師自身における子どもへの理解の深まりや周囲の人々の変容には大きく作用しなかった、③通常授業においてのみならず、校内研修などの様々な機会を活用して、子どもへの理解を深めたり、実際のかかわり方を工夫・改善したりしていると、3点にまとめ報告している。

重度・重複障害児は、運動器官や感覚器官に著しい制限や制約が生じていることが多く、日常生活環境下で子ども自身の力のみで学んでいくことが難しい。しかし、教職員が丁寧な関わりを行うことで着実に成長していくことが先行研究や実践から明らかになっている。また、重度・重複障害児にとって生命を維持するための健康管理だけでなく、他者とのやりとりや関わりなどのコミュニケーション活動が大切であることは言うまでもなく、特に学齢児においては学びのほとんどを学校教育が担っていると考えられる。重度・重複障害児における支援や指導の実践の場、学校教育において、どのようなことが課題とされ、どのような教育が実践されているのかを教職員の視点から明らかにすることは、大変意義のある研究であると考えられる。また、このことは、今後の重度・重複障害児の教育への一助になるのではないかと考えられる。

II 目的

本研究では、肢体不自由特別支援学校で教育に携わっている教職員に重度・重複障害児の指導に関する取り組みやその課題について自由記述式のアンケート調査を実施した。アンケート調査によって教職員が日々の重度・重複障害児に対する教育実践を行う上で、大切にしていることや課題等を感じていることを明らかにし、重度・重複障害児に対する学校教育における教育実践上の課題について検討し、考察すること

を目的とする。また、本アンケートは、全国の肢体不自由特別支援学校への調査項目作成のための予備調査と位置付けている。

Ⅲ 調査方法

1 対象者

対象者は、A県のB特別支援学校肢体不自由部門に所属する教職員（介助職員を含むため以後、教職員と記載する）16名（小学部4名、中学部3名、高等部6名、その他3名）のうち、本研究の目的等に同意した13名の教職員である。回収率は約81.3%であった。

B特別支援学校は、他の特別支援学校のように学部で分かれて子どもたちの教育実践を行っているのではなく、小・中・高等部それぞれの所属教職員が学部を超えて一部門としてまとまって、教育活動を実践している。そのため、どの対象教職員も各学部の目標や課題を共に共有しながら教育活動を実践しているのが特徴である。

2 調査期間及び手続

20XX年Y月に本調査について対象校に筆者が伺い、対象となる教職員に本研究の目的について説明をした。そして、Y月下旬に質問紙を配布し、Y+1月に回収に伺った。

3 調査内容

アンケートは、自由記述の設問のみである。質問は「職名及び経験年数等」（4項目）、「重度・重複障害児への日々の直接的な指導」（6項目）、「専門性の向上」（2項目）、「連携」（3項目）、「その他」（1項目）の5観点の質問内容を設定し、合計16問の質問から構成した。（質問紙は資料として掲載）

4 分析方法

それぞれの質問における回答をKJ法によってカテゴリ化して分析した。なお、一連の分析過程においては、筆者と特別支援教育に携わる大学教員1名で、協議しながら記述内容のカテゴリ分けの妥当性の検討も行った。

また、上記に記載したように、B特別支援学校においては、所属教職員が一部門としてまとまって、教育活動を実践しており、どの対象教職員も各学部の目標や課題を共有しながら教育活動を実践している。よって、一部門としての結果を分析した。

5 倫理的配慮

まず、対象教職員に説明をする前に、A特別支援学校の管理職にアンケートの目的と内容について説明をし、了解を得た。その後、対象教職員には、アンケート回答前に本研究の趣旨、研究協力の自由及び倫理的配慮について口頭にて説明を行い、承認を得た上でアンケートを配布した。また、集計においては個人が特定されないように配慮し、研究データの取扱についても厳重な管理を行った。なお、本研究の実施においては畿央大学研究倫理委員会の承認を得ている。（承認番号R5-25）

Ⅲ 結果

1 対象者の内訳

本研究の対象教職員で回答があったのは、教諭10名、講師2名、介助職員1名であり、講師、教諭については全てが9年以上の教職経験があり、肢体不自由教育の経験年数も2年～11年の経験を有する教職員から回答が得られた。また、重度・重複障害児の教育経験年数も少なくとも2年以上あり、最も経験の長い対象教職員は、他校種の特別支援学校における重度・重複障害児の教育経験も含め、14年の教育経験があった。

表1

	職位	教職経験年数	肢体不自由児教育	重度・重複障害教育
1	講師	14	3	2
2	教諭	28	9	6
3	教諭	26	4	2
4	教諭	40	5	5
5	教諭	12	9	9
6	講師	34	2	9
7	教諭	12	9	9
8	介助補助員		4	4
9	教諭	20	8	10
10	教諭	39	11	14
11	教諭	15	5	4
12	教諭	20	10	8
13	教諭	9	5	3

2 重度・重複障害児が高等部卒業時に身に付けて欲しいと思う力

この質問の回答については、19のカードに分類された。大カテゴリーとして、以下の「快・不快等を表出し、他者に伝える力」「他者の働きかけを受入れ、伝える力」「物事に興味関心をもち、生活を楽しむ力」「自己選択・自己決定」の4つに分けられた。

表2 重度・重複障害児が高等部卒業時に身に付けて欲しいと思う力

大カテゴリー	中カテゴリー
快・不快等を表出し、他者に伝える力(7)	1 快・不快等を他者に伝える力(3)
	2 快・不快等を表現する力(4)
他者の働きかけを受入れ、応える力(6)	1 他者の働きかけに応える力(4)
	2 支援を受け入れる力(2)
物事に興味関心をもち、生活を楽しむ力(5)	1 余暇活動を楽しむ力(3)
	2 刺激に気づき、反応する力(2)
自己選択・自己決定力(1)	自己選択・自己決定力(1)

3 重度・重複障害児の日々の指導において留意していること

この質問の回答については、40のカードに分類された。日々の指導に関しては、6つの大カテゴリーに分けることができた。しかし、そのほとんどが「子どもへの丁寧な関わりや働きかけ」であり、対象教職員が日々子どもたちにどのように関わっているかが分かる

結果となった。一方で、「身体の管理」の記載も多くみられ、重度・重複障害児にとって、健康管理は切り離せない事項であることが分かった。また、特別支援学校の教育はT・T（チーム・ティーチング）で行われることがほとんどであるため対象教職員も対象教職員間の連携を重視していることが分かった。

表3 日々の指導の中で留意していること

大カテゴリー	中カテゴリー
子どもへの丁寧な関わりや働きかけ(20)	丁寧な働きかけ(明るく、温かい、待つ)(4)
	子どもの表出を見逃さない(5)
	丁寧な声かけや会話(5)
	介助時の声かけ(5)
	スキンシップ(1)
身体の管理(6)	体調・健康管理(5)
	姿勢管理(1)
子どもの思いを共感・言語化(5)	子どもの思いを代弁(4)
	子どもの表出を客観的に捉える(1)
教職員間の連携(4)	教職員間の連携(3)
	看護師との連携(1)
授業時における工夫(4)	興味関心を学習の中心に(1)
	わくわくするような授業(1)
	家ではできないような体験(1)
	友だちとの関わりをもたせる(1)
環境設定(1)	環境設定(1)

4 重度・重複障害児の日々の指導において難しいと感じていること

この質問の回答については、19のカードに分類された。重度・重複障害児の日々の指導において、難しいと感じていることの多くに、「肢体不自由教育（重度・

重複障害教育）の専門性の維持・向上・継承」が挙げられている。一方で、子ども自身の実態から起こる健康状態の不安定さや指導の継続や積み上げが難しいと考えている教職員の数が一定数いることも分かった。

表4 重度・重複障害児の日々の指導において難しいと感じていること

大カテゴリー	中カテゴリー
肢体不自由教育の専門性の維持・向上・継承(13)	肢体不自由の専門性・継承が難しい(3)
	本人の気持ちが代弁できているか不安(2)
	子どもの実態把握・理解が困難(2)
	教職員間の実態把握のずれ(1)
	情緒や気持ちの指導の困難(1)
	魅力ある授業づくり(1)
	子どもの実態を踏まえた授業づくり(1)
	待つこと(1)
	子どもの介助(1)
子どもの健康管理及び維持の困難さ(3)	子どもの健康管理・維持が困難(3)
子どもの実態の難しさ(2)	子どもの経験不足(1)
	子どもが学習を定着する力の弱さ(1)
連携(1)	各機関等との連携(1)

5 重度・重複障害児の日々の指導において困難に感じていることへの軽減策

この質問の回答については、17のカードに分類された。日々の指導において困難に感じていることに対し、何をすればそれが軽減されるかという質問に対し

て、日々の「学習活動の充実」が挙げられており、対象教職員が教員として日々の授業に力を入れていることが分かった。また、ICTの活用を子ども側だけでなく、教職員側も活用したいという考えがあることも分かった。

表5 重度・重複障害児の日々の指導において困難に感じていることへの軽減策

大カテゴリー	中カテゴリー
学習活動の充実(4)	学習指導要領の実現(2)
	学びの環境設定(2)
教職員の連携・情報共有(3)	教職員の連携・情報共有(3)
研修(2)	職員研修(1)
	OJT(1)
子どもの体調管理・維持(2)	子どもの体調の管理・維持(2)
教職員の業務等のICT化(2)	授業内容のデータベース化(1)
	子どもの実態等のデータベース化(1)
障害を補うための機器の導入(2)	肢体不自由を補うための機器等の導入(2)
多職種間での連携(2)	学校内に専門家の配置(1)
	主治医との連携・強化(1)

6 個別の教育支援計画や個別の指導計画を指導に生かすための工夫

この質問の回答については、10のカードに分類され

た。この質問項目には未記入の対象教職員が複数人いた。

表6 個別の教育支援計画や個別の指導計画を指導に生かすための工夫

大カテゴリー	中カテゴリー
教職員間の情報共有(8)	教職員の情報共有(4)
	定期的な話し合いをもつ(2)
	ICTを活用しての情報共有(1)
	目標を教室内に掲示(1)
指導計画の形式の工夫(2)	個別の指導計画の形式を工夫する(2)

7 個別の教育支援計画や個別の指導計画が日々の指導に生かせない要因

この質問の回答については、12のカードに分類された。未記入の対象教職員もいたが、困難な理由をより多く記載している対象教職員もいた。最も大きな要因として、「指導者間の個人差によるずれ」が挙げられ

ており、子どもの実態把握や必要だと思われる内容が教職員によって異なっていることが分かった。また、記載事項の中に、「担任の先生が中心となって記載、評価するので、あまり意識していない」、あるいは「記載事項に従っている」という内容の記載も見られた。

表7 個別の教育支援計画や個別の指導計画が日々の指導に生かせない要因

大カテゴリー	中カテゴリー
教職員間の個人差によるずれ(5)	教職員間で評価のずれがある(3)
	自立活動の目標の根拠が不明瞭(1)
	話し合いの時間の確保が困難(1)
学習指導要領との関連(2)	学習指導要領との関連が難しい(2)
子どもの実態と指導計画が合致していない(2)	子どもの実態からは毎年の作成が困難(1)
	子どもの体調不良により実施が困難(1)
個別の指導計画の形式が実態にあっていない(2)	変更がタイムリーに行えない(1)
	支援が多く記載できない(1)
授業内容との相違(1)	個別の指導計画と授業内容が異なる(1)

8 重度・重複障害児の日々の指導においてやりがいを感じる

この質問の回答については、20のカードに分類された。「教員の働きかけで子どもの反応が見られた時」

が最も多くのやりがいを感じるということであったが、「子どもたちの健康が維持できている時」という内容も見られ、重度・重複障害児にとっての日々の健康管理の重要性も分かった。

表8 重度・重複障害児の日々の指導においてやりがいを感じること

大カテゴリー	中カテゴリー
教職員の働きかけで子どもの反応が見られた時(9)	働きかけによって子どもの反応が見られた時(7)
	授業中に子どもの笑顔が見られた時(1)
	名前を呼んだ時にこどもが返事をした時(1)
子どもたちの健康が維持できている時(4)	子どもたちが元気に過ごしている時(3)
	元気に行事に参加できた時(1)
子どもたちとやりとりが成立した時(3)	子どもたちと意思の疎通ができた時(1)
	子どもたちと信頼関係が構築できた時(1)
	子どもたちと達成感が共有できた時(1)
子どもの成長を他者と共感できた時(2)	子どもたちの輝く姿が他の教師や保護者と共有できた時(2)
子どもに学びの成果が見られた時(2)	学習したことが生活場面で発揮された時(1)
	できなかったことができた時(1)

9 重度・重複障害児の教育を行うための対象教職員の専門性

この質問の回答については、28のカードに分類された。重度・重複障害児の教育を行うための専門性として最も多かったのは「身体に関する知識・技能」であり、「障害に対する知識・指導力」よりも多く記述さ

れていた。ここでも、重度・重複障害児にとって身体・健康に関する問題はとても大きく、対象教職員も強く意識していることが分かる。また、教師の主目的であるともいえる「授業力・指導力」は挙げている対象教職員もいるが、記載した対象教職員は3人程度であり、あまり多いとは言えなかった。

表9 重度・重複障害児の教育を行うための教師の専門性

大カテゴリー	中カテゴリー
身体に関する知識・技能(10)	身体・嚥下・医療的ケア・姿勢などの知識と技術(6)
	身体の仕組みについての深い知識(3)
	身体の不調を見抜く力(1)
障害に対する知識及び指導力(7)	障害に対する知識(3)
	子どものアセスメントやアプローチ(2)
	重度・重複障害児のコミュニケーションや社会性の知識・指導力(1)
	重度・重複障害児のQOLについての指導(1)
子どもの反応への観察力と共感する力(4)	子どもの発信を見逃さない(1)
	子どもの小さな反応にも共感し受け止める力(1)
	発語がない子どもの気持ちを汲み取る力(1)
	観察力(1)
授業力・指導力(3)	学習指導要領の目標を意識した授業づくり(1)
	子どもの実態を踏まえて、学習内容を提供する力(1)
	子どもが楽しいと思うことを提供する力(1)
発達に関する知識・理解(2)	発達の筋道や発達段階の知識・理解(2)
教職員の人間性等(2)	先生自身のより高い知識と表現力(1)
	人間性・感受性(1)

10 専門性を高めるために努めていること

この質問の回答については、19のカードに分類された。専門性を高めることについては、中カテゴリーに記載されている内容が大カテゴリーにそのまま分けられたので、大カテゴリーのみの記載としたが、研修会

の参加や文献で学ぶことよりも、「教職員同士の教え合いや情報共有・交換、相談」を行うことで、高められると感じ、実行している対象教職員が多いことが分かった。

表10 専門性を高めるために努めていること

大カテゴリー
教職員同士での教え合い、情報共有・交換、相談(10)
研修会への参加(4)
文献研修(4)
専門の講師を招聘し、指導助言を受ける(1)

11 その他

その他に、「教職員相互の連携」「関係機関との連携」「保護者との連携」について質問した。どの項目も工夫していることに、「情報の共有」が挙げられており、いかに丁寧で詳細な情報の共有が必要であるのかが分かった。

「教職員相互の連携」では、その他に仕事以外の日々の何気ない話を意識してすることや、担当している子どものことについてできるだけ話をするように心がける必要性が記載されていた。

また、「関係機関との連携」では、複数の関係機関と連携を取らなければならないことが多く、他の関係機関同士の連携も問題となることがあることが分かった。そして、それぞれの機関の役割や目的について理解しておくことでより円滑な連携が行われることも分かった。

「保護者との連携」では、保護者の気持ちを受け止めたり、保護者に寄り添ったりする姿勢の必要性について記載されていた。記載の内容について集約すると上記に示した通りであるが、どの対象教職員も日々の実践の様子が丁寧にそして、具体的に記載されていた。また、その記述より、保護者との日々の情報共有を丁寧にすることにより、保護者との考え方の相違が少なくなることが示されていた。

最後に重度・重複障害児に関する教育について思っていることについて自由記述を求めた。重度・重複障害児だからこそ、子どもたちの動きに敏感になり、子どもたちの気持ちを受け止め、対応していく大切さについて複数の対象教職員が記載していた。また、日々の指導が命に直結しているため、配慮がとても大変だと思っている対象教職員が複数いることも分かった。

IV 考察

本アンケートは、全国に「重度・重複障害児の指導に関わる教職員の意識調査」をするための予備調査として実施した。そのため、全ての回答を自由記述とし、対象教職員の思いや経験など、数字では表すことのできないデータを集約して、重度・重複障害児に日々関わっている教職員の思い等の理解を深めること、そして、その思いを直接的に受け止めることを目的としている。

1 重度・重複障害児への直接的な指導について

「卒業時に身に付けて欲しい力」として、4つの大カテゴリーに分類はしたが、どれも重度・重複障害児が他者からの働きかけを受け止め、それを何らかの方法

で表出する、いわゆる他者とのやりとりやコミュニケーション力といわれる力であると考えられる。「自己選択・自己決定」という回答もあったが、これは記載の内容から子ども自身の実態に応じたという意味であり、いずれも重度・重複障害児が他者からの刺激や働きかけを受け止め、自己の思いを何らかの方法で表出することであり、集約すれば、他者とやりとりする力、あるいはコミュニケーション力と考えられる。

重度・重複障害児のコミュニケーションについては、以前より研究が進められており、鯨岡（1997）の「原始的コミュニケーション」、土谷（2011）の「共創コミュニケーション」、梅津（1997）の「行動体制と信号系活動」等是有効なコミュニケーションに関する理論であり、筆者もこれらの理論を文献で考察した（山根、2022）。また、生理学的指標におけるコミュニケーション活動についても研究が積み重ねられており、細渕・大江（2004）、川住ら（2008）、そして、筆者ら（山根・小枝、2006、山根・小枝、2008、山根・小枝、2011）によっても、生理学的指標の研究は実施され、その成果も明らかにされている。これらのことから、筆者は、重度・重複障害児のコミュニケーション活動に注目し、その重要性についてまとめている（山根、2022）。そして、重度・重複障害児のコミュニケーション能力を育てるためには、教職員の日々の関わりこそが重要であり、大切であることをまとめており、本調査の結果とも一致している。しかし、これらの働きかけが難しい理由として、「肢体不自由教育（重度・重複障害教育）の専門性の維持・向上・継承」が挙げられており、重度・重複障害児につけたい力や対象教職員の子どものたちへの強い思いはあるけれども、実際に重度・重複障害児にどのように関わってよいのか、関わり方が本当に正しいのかなど、困り感を生じていることが本アンケート調査の結果から示唆された。このことについては、各自治体の教職員の異動方針等による要因も大きいと思うが、文部科学省が公表している学校教員統計調査（2024）によると、他校種ではあるが、どの校種も40代の教員が少なく、ベテランとして指導できる対象教職員の人数が限られていることも要因の一つとして考えられる。また、その軽減策として、対象教職員は「学校における教育活動の充実」や「対象教職員同士の情報共有や連携」を挙げており、校内の取組の中でこれらの問題を解決していきたいという気持ちが強いことが認められた。

また、「日々の指導の中で留意していること」「重度・重複障害児の日々の指導において難しいと感じていること」「重度・重複障害児の日々の指導において困難に感じていることへの軽減策」の質問項目について、

これらの全ての中に、「健康管理・維持」など身体に関わることが記載されている。このことから肢体不自由特別支援学校においては重複障害学級が増加しているだけでなく、子どもたちの重度化、絶えず命にかかわるような子どもや健康状態が安定しない子どもたちの在籍率が増加していることが分かる。つまり、重度・重複障害児を教育する時に、身体（健康管理等）に関する配慮の重要性が示唆された。

「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」においては、記載の内容や未記入の回答から鑑みて、他の質問項目に比べて対象教職員の関心の低さ、指導に生かすことが困難、既に問題もなく進められているなどの理由が示唆される。

これは、「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」については、特別支援学校では、既に実施されてから十分な時間も経過しているだけでなく、文部科学省からも活用の仕方のみならず、様式例も提示されており、作成・活用環境が明確になっているためであると考えられる。一方で、活用が困難なことについて、日々の指導に活用できないこと等について記載されている。記載内容から考えると、文部科学省が提示している様式では重度・重複障害児の教育を行うにあたって記載しづらいものがあるのではないかと推察される。今後、重度・重複障害児用の「個別の教育支援計画」及び「個別の指導計画」の様式についても検討する必要があることが示された。

2 教職員の専門性の向上について

教職員の専門性の向上について、重度・重複障害児教育の専門性として、「障害に対する知識及び指導力」「授業力・指導力」よりも「身体に関する知識・技能」についての記載が多かった。これは重度・重複障害児における身体の健康管理及び維持が子どもたちの日々の生活にとってどれだけ重要なことであるかを示唆するものである。しかし、一方で、対象教職員にとって、重度・重複障害児の指導において、教育という視点の前に健康管理・維持というところまでで指導が終了してしまっているのではないかと考えられる。対象教職員は卒業時に身に付けたい力については学校教育や日々の関わりの中で身に付けられるものを大切であると認識しているにも関わらず、実際は健康管理・維持を主とした教育実践になっているのではないかと考えられる。これが、前の項で示した「肢体不自由教育（重度・重複障害教育）の専門性の維持・向上・継承」にも深く関連付けられることであると考えられる。今後、学校教育において、重度・重複障害児への関わりを身体に関する療育的な実践に加えて、コミュニケー

ション活動の充実などの教育実践の在り方について検討していくことの重要性が示された。

また、「専門性を高めるための方策」として、「教職員間での情報共有や相談」が最も多い回答であった。これは、重度・重複障害児教育における専門性の考え方が、より個に応じた関わり方ができるかどうかということに重きを置いているということとも考えられる。今後は重度・重複障害児教育の教職員における専門性の捉え方についても検討していきたい。

3 連携について

連携については、「教職員間」「関係機関」「保護者」の3つの視点から質問を行った。どの内容も日々の丁寧な情報共有の重要性が挙げられていた。また、関係機関においては一人の子どもが複数の機関と契約等していることが多く、複数の関係機関との連携が必要となる。「それぞれの関係機関の役割について認識した上で連携を取っていくこと」を工夫している点に回答している対象教職員もあったが、これは、お互いの立場を踏まえた上で連携を進めていくことが大切であるとも言える。また、対象教職員の日々の実践の様子や、丁寧な保護者とのやり取りの様子から、保護者との連携を円滑に行うためには、ただ単に情報を共有するだけでなく、保護者に寄り添う姿勢も大切であることが示されていると言える。これは、こども家庭庁（2023）や乗原ら（2019）も述べているが、特に重度・重複障害児の子どもは日々の生活において全介助が基本であり、家族（保護者）への負担が大変大きい。身体的支援だけではなく、心理的支援も行う必要がある。よって、学校現場において保護者と連携するには、まず、家族（保護者）への気持ちの寄り添いや理解が基盤とならなければならない。

以上3つの視点より考察を行ったが、今回は協力校1校に絞り、アンケート調査を実施した結果、重度・重複障害児の教育に携わる教職員が、いくつかの困り感を抱えていることが分かった。重度・重複障害児の教育は大変難しく、教職員の専門性も問われるが、現在の特別支援学校の現状において、その専門性が維持・継承できにくい状況であることが示唆された。重度・重複障害児にとって適切な関わりに基づく、よりよい教育が提供されるよう、再度、特別支援学校の重度・重複障害児教育について、検討していきたい。

謝辞

本研究の趣旨を理解していただき、回答にかなりの時間と負担を要する調査であったにも関わらず協力し

ていただいたB特別支援学校肢体不自由部門の教職員の皆様に深く感謝し、ここに記してお礼を申し上げます。

V 文献

- ・船橋篤彦；肢体不自由教育の専門性向上に関する現状と課題（1）—自立活動の専門性向上に向けた予備的検討—、特別支援教育実践センター研究紀要、14、115-122、2016
- ・川住隆一・佐藤彩子・岡澤慎一・中村保和・笹原未来；応答的環境下における超重症児の不随的微小運動と心拍数の変化について、特殊教育学研究、46(2)、81-92、2008
- ・鯨岡峻；原初的コミュニケーションの諸相、ミネルヴァ書房、1997
- ・栗原雛子、山口慶子、涌水理恵；在宅生活を送る重症心身障害児の養育者が抱く療育支援ニーズの実態、日本重症心身障害学会誌、44（3）、519-527、2019
- ・こども家庭庁、重症心身障害児者等の家族支援、2023
- ・厚生労働省；21世紀における国民健康づくり運動〈健康日本21〉総論 参考資料、2000
- ・文部科学省；令和4年度 特別支援教育資料、2023
- ・文部科学省、令和4年度学校教員統計中間報告（学校教員統計調査の結果中間報告）、2024
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課長、個別の教育支援計画の参考様式について（事務連絡）、2021
- ・文部科学省；「令和の日本型教育」の構築をめざして～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）、2021
- ・野崎義和；特別支援学校における超重症児への指導とその成果に関する意識調査；科学研究費助成事業研究成果報告書、2017
- ・越智文香・越智彩帆・榎木暢子・荻田知則・加藤公史；キャリア教育に関する肢体不自由特別支援学校教員に関する意識調査—子どもの「夢や願い」と授業実践との関連—、Journal of Inclusive Education、4、74-86、2018
- ・大江啓賢・川住隆一、重症心身障害児及び重度・重複障害児に対する療育・教育的支援に関する研究動向と課題、山形大学紀要（教育科学）、16（1）、47-57、2014
- ・芝山明義；教師の専門性と教師教育の課題—教師のキャリアと力量形成との関連について—、鳴門教育大学研究紀要、25、158-165、2010
- ・Society5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース；Society5.0に向けた人材育成～ 社会が変わる、学びが変わる ～、2019
- ・武蔵博文；重複障害児教育に関する学校教員の意識調査、香川大学研究報告、4、1-12、2021
- ・土谷良巳；欧州における先天性盲ろうの子どもとの共創コミュニケーションアプローチ、上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要、17、1-11、2011
- ・梅津八三；重複障害児との相互輔生、東京大学出版会、1997
- ・山根康代；重症心身障害児及び重度・重複障害児の教育支援に関する現状と課題（その1）、畿央大学紀要18（2）、43-49、2021
- ・山根康代；重症心身障害児及び重度・重複障害児の教育支援に関する現状と課題（その2）、畿央大学紀要19（1）、67-73、2022
- ・山根康代；重度・重複障害児及び重症心身障害児教育におけるコミュニケーションに関する研究の動向と課題、畿央大学20（1）、105-110、2023
- ・山根康代・小枝達也；重症心身障害児への足湯の効用について—心拍変動への周波数解析による分析—、鳥取大学地域学論集 2（3）、343-351、2006
- ・山根康代・小枝達也；重症心身障害児への足湯の効用について第2報—心拍変動への周波数解析による分析—小児保健研究 67（6）、885-889、2008
- ・山根康代・小枝達也；重症心身障害児における立位姿勢の心理的負担に関する検討、鳥取大学地域学論集 8（11）、59-65、2011
- ・World Health Organization；PROGRAMME ON MENTAL HEALTH WHOQOL User Manual、Division of Mental Health and Prevention of Substance Abuse、1998

【資料】 重度・重複障害児の指導に関するアンケート調査項目

1 ご職名及びご経験年数等

- (1) 現在のご職名を教えてください。
- (2) 教職のご経験年数は何年ですか。(講師歴も含む)
- (3) そのうち、肢体不自由児と関わったご経験は何年ですか。(肢体不自由特別支援学校及び肢体不自由特別支援学級での経験年数) 複数の学校をご異動になった場合は、総経験年数をお書きください。
- (4) 教職のご経験の中で、重度・重複障害児と関わったご経験年数をお書きください。

2 重度重複障がい児への日々の直接的な指導

- (1) 重度・重複障害児が高等部卒業時に身につけておいて欲しいと思う力は何ですか。具体的に教えてください。
- (2) 重度・重複障害児の日々の指導において、あなたが最も留意して指導をしていることは何ですか。具体的に教えてください。
- (3) 重度・重複障害児の日々の指導において、あなたが難しいと感じていることは何ですか。具体的に教えてください。
- (4) (3) を指導するためにどのようなこと(もの)があれば、指導の難しさが軽減すると思いますか。
- (5) 個別の教育支援計画や個別の指導計画が日々の指導に生かせるように工夫していることがあれば教えてください。また、日々の指導に生かすことが難しい場合はその問題点をお書きください。
- (6) 重度重複障がい児の日々の指導において、あなたがやりがいや達成感を感じる時やことについて教えてください。どのような時やことなのか、具体的に教えてください。

3 専門性の向上

- (1) 重度・重複障害児に教育を行うための教師の専門性とはどのようなものだと思いますか。
- (2) 専門性を高めるためにあなたが取り組んでいることや工夫していることについて、具体的にお書きください。

4 連携

- (1) 重度・重複障害児の指導において、教員相互の連携・協力を行うために必要だと思うことや日々工夫していることをお書きください。
- (2) 重度・重複障害児の指導において、関係諸機関との連携を行うために必要だと思うことや工夫していることについてお教えください。また、難しい場合はその問題点についてお教えください。
- (3) ご家庭との連携を行うために必要だと思うことや工夫していることについてお教えください。また、難しい場合はその問題点についてお教えください。

5 その他

重度・重複障害児の指導を行うにあたって、先生方が日々感じていらっしゃることや思っていることを自由にお書きください。
ご協力ありがとうございました。